

繪本通俗三國志

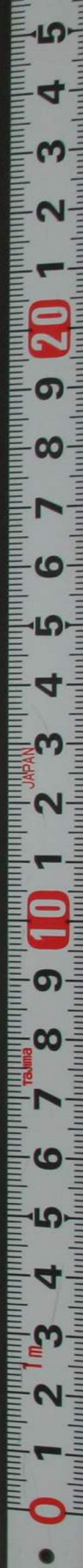
二編

十

4.9  
へ 21

221

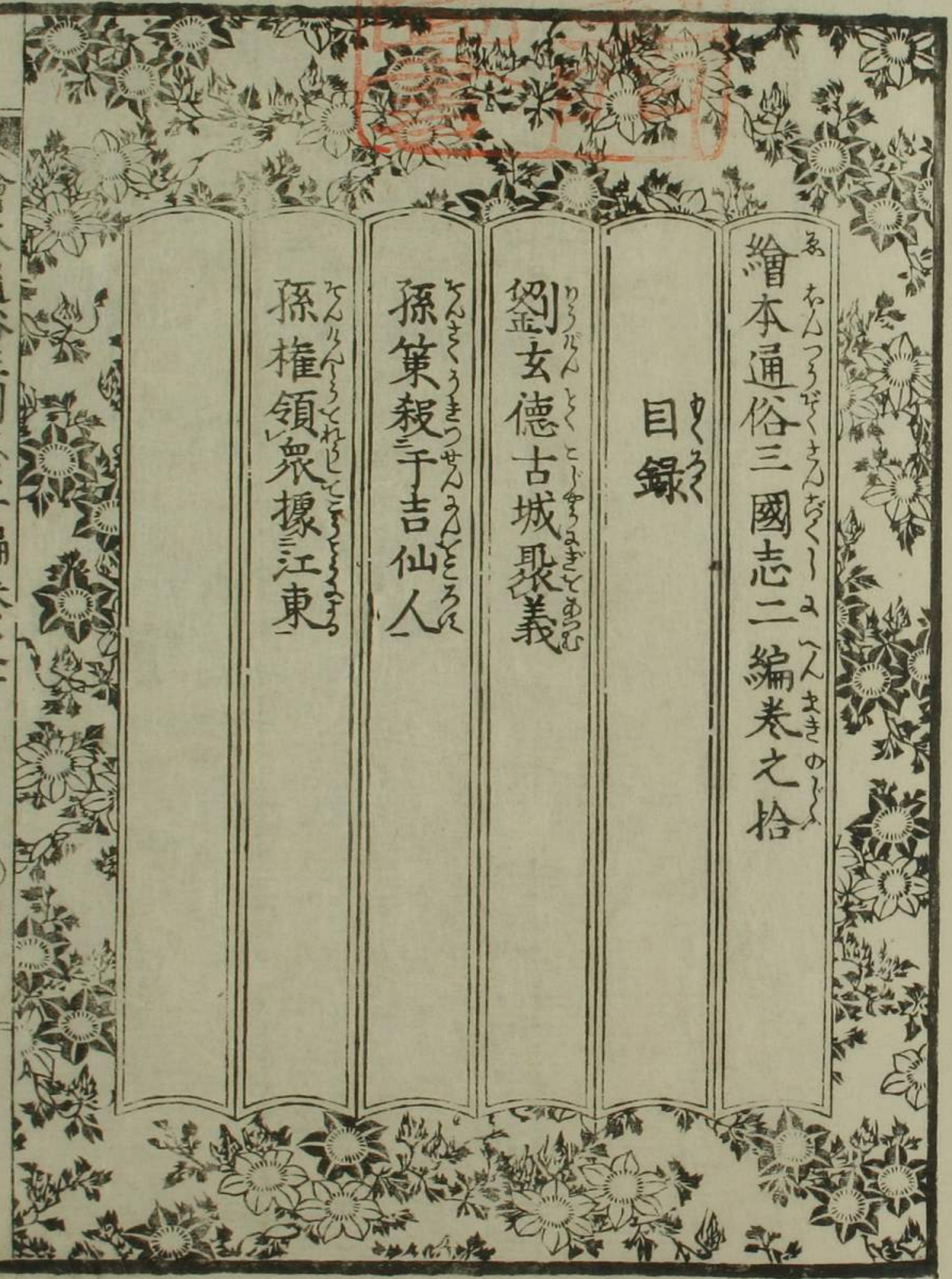
20





六  
221  
20

東  
方  
集  
卷  
之  
十



繪本通俗三國志二編卷之拾

目錄

劉玄德古城聚義

孫策親于吉仙人

孫權領眾據江東

繪本通俗三國志二編卷之十

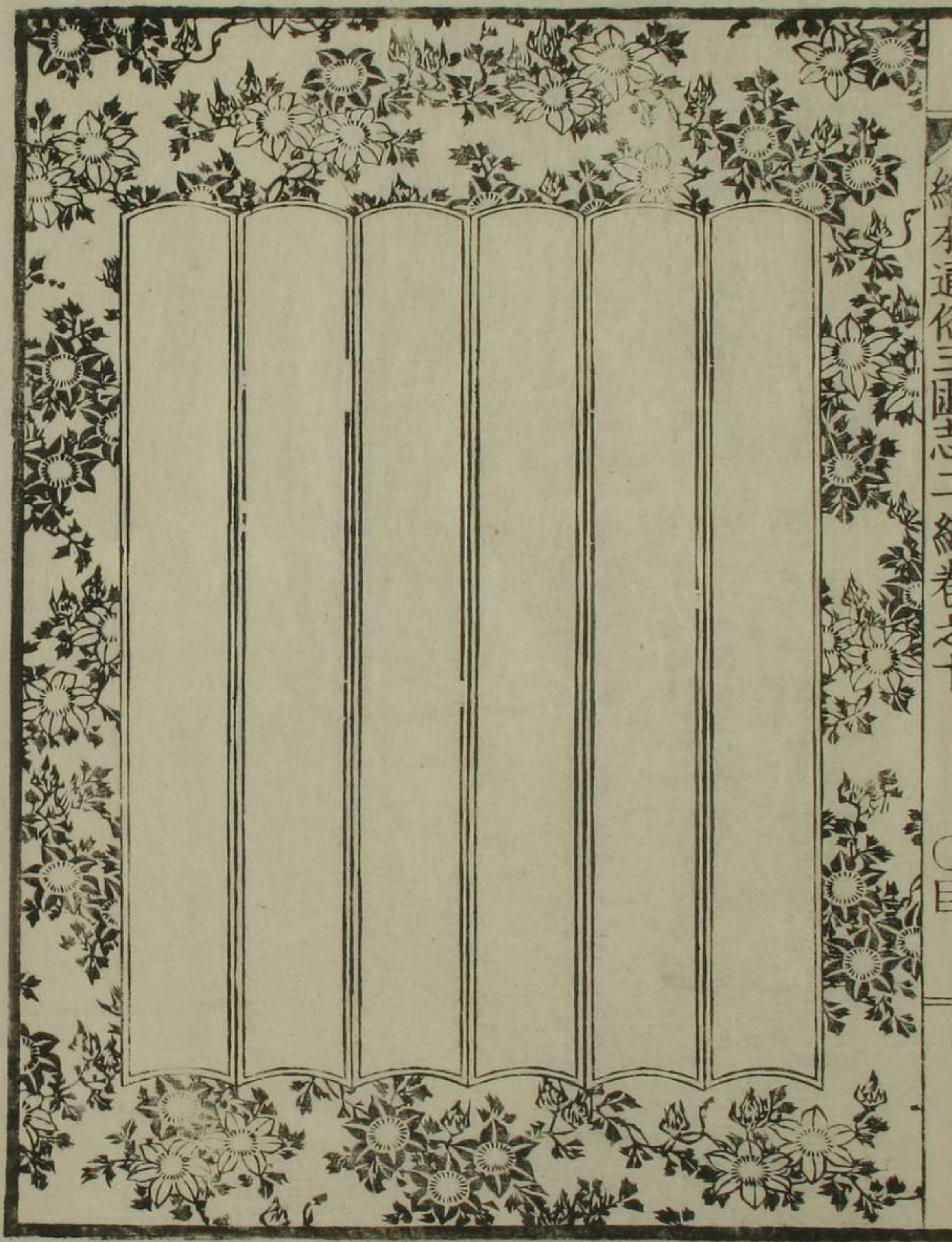


繪本通俗三國志二編卷之拾

劉玄德古城聚義

張飛城門をひらき、二夫人をまねき入る。不ふ尔候より  
 報じ、只今四五十騎のほをの南の方よりあつて来り、  
 といひ、まを深くあやしとてあつて。ふ安らぎを、  
 まの果しと弓箭とをり、さば騎馬の兵南門に馳来り、  
 張飛ぞんそとづく。馬より下たり。張飛ぞく、  
 竺糜茅兄弟あり、まをまき、まを立む。此まきたり  
 ぬんぞと問ふ。糜茅アツる、  
 故郷よりへり、人の行末を尋き、  
 ひ関羽の曹操を降まると、  
 河北へ行

繪本通俗三國志二編卷之拾



繪本通俗三國志二編卷之拾



んとぞ打出し昨日路より文が張姓の將軍眼大とて  
虎鬚あるが古城を奪ひとりて籠る世も怖る大  
將うまといふを通るそのあり某をさすやうあつ御  
らんとあつ尋ね来り張飛喜んぞやうの関羽とて  
は都と逃し出二夫人を送りて口今城中へ入り孫乾又  
皇叔の消息をき来りて城中にありそや来て對面  
志ありとて相伴を内へ入りては夫人を見へて一度は哀  
一度は喜ぶ然人よを鑑と仰ぐ收日の疲をて休む甘夫  
人都よその事とての語り関羽忠義の事と説ゆ張  
飛感嘆してやまざ羊を殺して酒宴をてめく関羽は  
るいやと劉皇叔の面をえさき酒と飲んども咽まくなむ

孫乾曰く汝南をさす程ちう明日行て皇叔を見へ関羽  
の身志うとて次乃日孫乾と十騎ありを率て汝  
南へ行玄德を尋ねて劉辟對面してやうの皇叔の  
間ち居ひひが小勢よと事難成とて三日己前  
又河北へ行あり関羽心喜ひて快いたる体ありを  
孫乾やうの將軍をさすは憂ひあふとあつ某河北  
行て皇叔を伴ひ来るとてむふとて又古城よりへ  
とよの事と議さると張飛やうの志林ががが河北  
行へ関羽曰くこの城はをホが一命と守て頼とさる  
なあり御辺のむくしく出るとあつとて孫乾と  
は行へ張飛曰く御辺へ衣冠が大將顔良文醜とま



ろせりゆ。行むる害ある。関羽が曰く。安くあゆみ入るを  
 機と臨む。変は應ぜんとす。孫乾と二十騎と率しと打出  
 くる。周倉とてそやたる。臥牛山に住る裴元紹が手勢いふ。わど  
 うある。周倉君曰く。兵は五百余人。馬は五六十疋。ゆゆ。関羽が  
 りる。へる。まき。まき。まき。まき。河北へ行皇叔とむ久と古城は回らる。  
 甬がまき。臥牛山へ行裴元紹との外に勢を駈あゆめ。本道  
 は出さむ。久はまき。周倉命と受使然とて。去る。関羽は  
 路といそだ。まき。まき。まき。まき。及る。界。至る。孫乾曰く。將軍の辺  
 は宿と借さ。まき。まき。まき。まき。待。某はまき。行。皇叔は見。計と  
 設け。脱。来。入。関羽。志。入。と。村の内へ。宿と  
 借。家主。出。合。と。名字と問。へ。関羽。わ。き。ま。ま。事。の。中。と。決

る。家主。喜。ん。ど。り。る。某。の。関。氏。と。関。定。と。す。の。あり。久  
 く。將。軍。の。威。名。と。ま。き。い。と。幸。見。ゆ。る。ゆ。得。たり。と。二。人。の。子  
 と。出。し。て。懇。懇。と。持。成。関。羽。二。人。の。名。と。問。は。関。定。り。る。兄  
 と。関。寧。と。い。ふ。と。儒。學。と。好。む。弟。と。関。平。と。い。ふ。と。武。藝。と。ま  
 くら。ざ。り。関。羽。と。ま。き。ま。ま。二十。騎。の。兵。と。ま。か。ま。ま。應  
 置。と。の。身。の。関。定。が。家。に。留。り。と。ゆ。ゆ。孫。乾。が。消。息。と。待  
 居。たり。孫。乾。と。な。一。騎。裴。冀。及。い。い。と。ひ。そ。ら。ま。玄。徳。と。ま。ま。と。人  
 と。事。の。仔細。と。決。り。と。ま。ま。玄。徳。が。ゆ。ゆ。あ。く。喜。び。近。比。簡。雍。と。ま。ま  
 と。尋。ね。と。あ。ま。来。れ。の。と。ま。ま。計。と。定。め。と。ま。ま。古。城。へ。引。取。と。ま  
 簡。雍。と。ゆ。ゆ。と。議。せ。と。ま。ま。れ。ば。簡。雍。と。ま。ま。君。明。日。裴。紹。と。見。へ  
 荆。及。の。劉。表。と。大。國。と。領。し。と。勢。を。い。盛。ん。あり。某。行。と。好。む

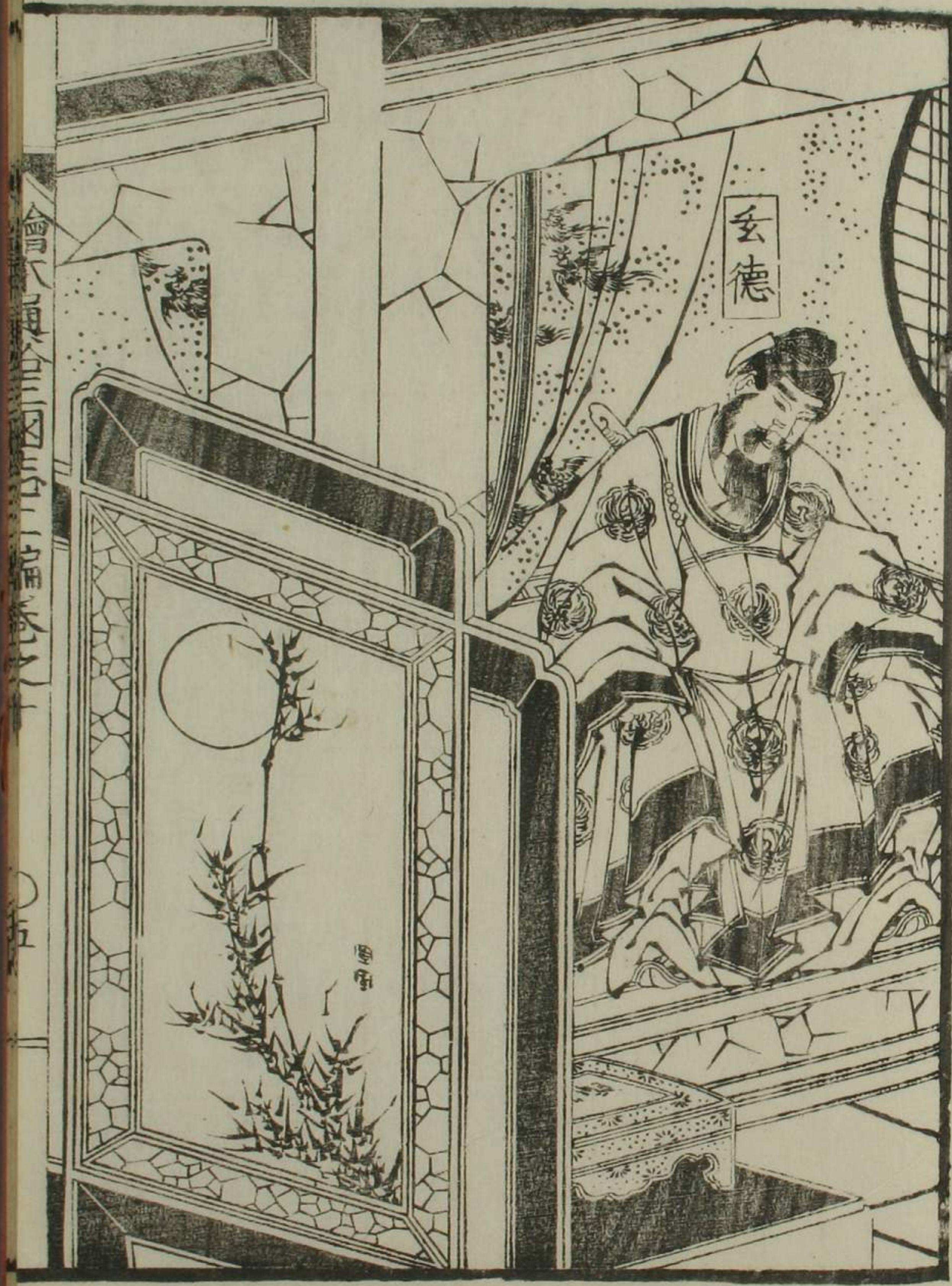
新編通鑑二國志二續卷之十



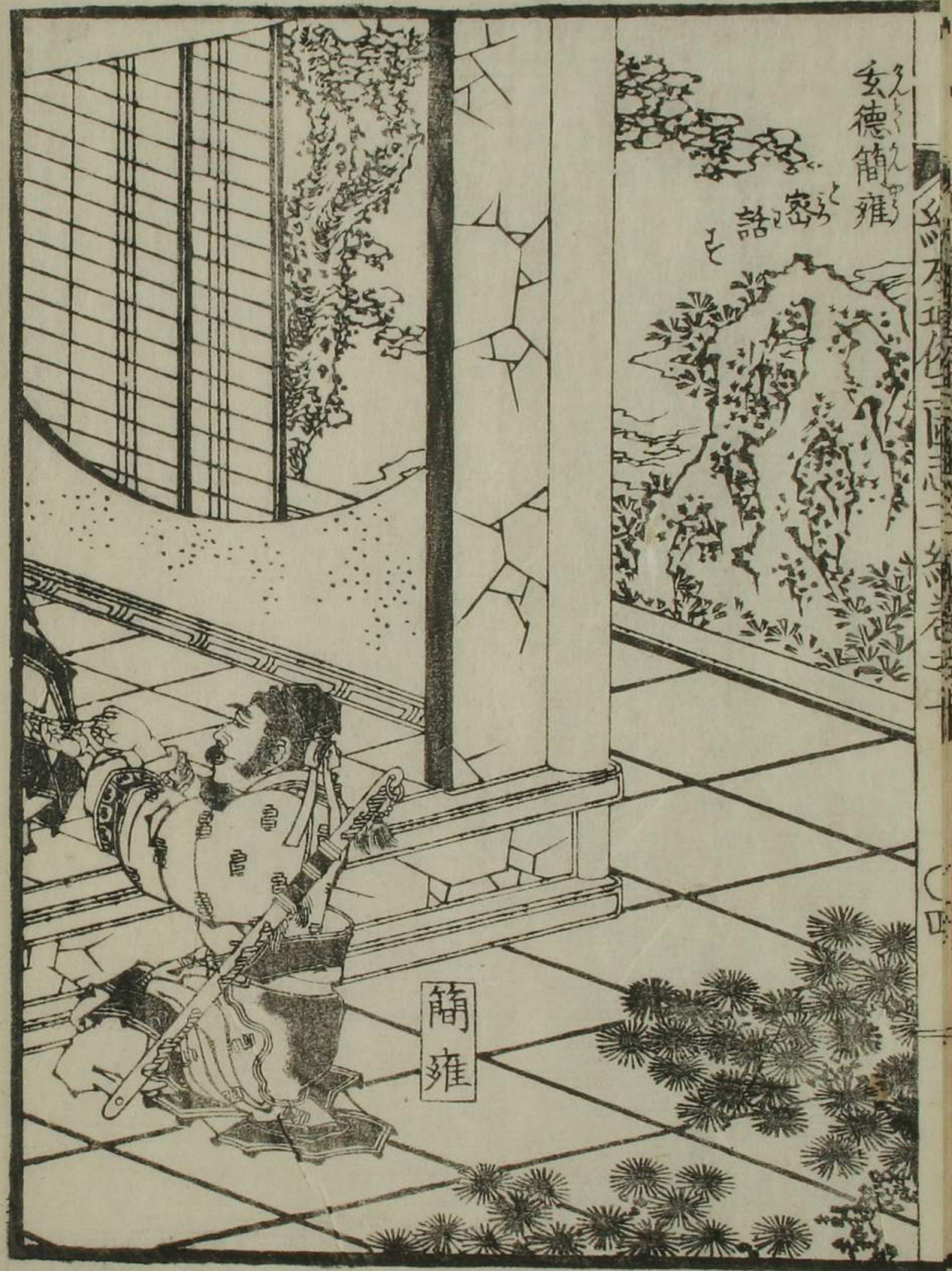
いすび。もに曹操と伐んと云む。袁紹があふに許諾せん。その  
時は出と身と脱まぬ。其の別は計とて。出た人。玄徳  
まの義をうとんと。次乃日袁紹と見へ。さき。荆乃の  
太守劉表は九郡の地は據り。兵多く糧足まり。其の好む  
むす。都と攻る。わとあら。曹操一鼓と破る。袁紹  
曰。昔日とて。使とめ。好む。はんとし。劉表  
あふ。従ふ。た玄徳の曰。劉表は某と漢室同宗の親族。  
袁紹は曰。劉表は。天とあふ。患う。あ  
人御辺。あ。行。近北関羽とて。都と出。尋ね来  
といふ。太あり。あ。来。首と刎。顔良文醜は仇と

報せ。玄徳の曰。顔良文醜は二匹の鹿あり。関羽は二匹の虎  
あり。二匹の鹿を失ふ。一匹の虎を得。曹操とて。畏る。足  
を袁紹笑のさす。い。實。関羽と愛む。い。戯ま  
と。御辺。ま。孫  
乾と途中へ出。関羽と。あ。招。袁紹と云。と  
紹は告。中。玄徳。あ。出。後。簡雍は。袁  
ら。再。回。表紹は曰。と。簡雍は曰。  
某は。伴。行。劉表は利害を説。二匹の玄徳  
の。早。將軍。袁紹。喜。び  
まの。意。恨。御辺。従。行。玄徳と取。逃。を





卷之五



卷之五



ふといひなきに簡雍拜謝して去らり。玄徳は関羽とまはれしむ  
る為ありとてまづ孫乾を出し次日袁紹見へて只今打  
立す。トさきもこれに袁紹白く御辺一人よとて他國へ行  
事。若しは簡雍を伴ひゆきとて相議りて事を行ひぬ。  
玄徳命と受即時に簡雍と馬を飛して城を出らざれば  
郭図よの由を言ふといふ。袁紹見へて今又簡雍とて  
一行を事とふまじとあつて。いふに一回りて今又簡雍とて  
荆及び行らば二度取らば。早くと召回しぬ。袁紹曰  
再あよとて疑心多た。簡雍す計とふまじとてあんの患あ  
らんとて更省ざりし。郭図長嘆して退出を玄徳を簡  
雍と冀州の塚へ出ぬを孫乾待受とては関定が家に至

る関羽門外に出ひ人手を執り涙とあふ。なぐひは失散の情を  
熟りなきに主人関定二人の子を引く。玄徳は見ゆ関羽  
のいまの人の某とあふ。関氏よとて。次男関平と某  
養子よ仕らんと存するあり。玄徳の曰く。行年幾何ぞ関  
定が曰く。関平十八歳よとて。玄徳の曰く。御辺二人の子あ  
り。関羽のいぬとて子と持て養ふ。子とせむ。関定は  
いぬ。孫乾が尊命に従はん。玄徳はなりあき喜び関平とせ  
て。関羽を拜しとて父とせし。袁紹が射手と向ぬ内は早く打  
立んとて。家を出て馬をよめぬ。関定とて送りて相別  
る。関羽本道と歴て臥牛山に程ちうくありたる。周倉  
叔十騎と率して馳来り。関羽先とて手と有て



朱よとてたつるものありき。如何あるゆへと問は周倉答ふ。い  
る。其きたる臥牛山へ行し。何くともまづ一人乃大将馬を進  
め。通る。裴元紹と鋒先をまじり。たゞ一合は刺殺し。相  
従ふ勢をとり。降ら。却て己がものとし。山中は陣  
と取某が預け置る士卒をまねけ。彼大将と始を  
と。来るものま。某は久きを推寄り戦ふ。彼大将能鎗  
とほふ。某三々無ま。深平とゆひ。是は  
ま。来るもの。玄徳は曰く。その者名字は去き。周倉は曰は  
る。名乗る。武藝ま。越。関羽きて。い  
て。その人は對面せん。青龍刀のさげ。真先は。い  
玄徳の後。臥牛山へ上り。周倉山の麓に到り。大

音あびて叫び。彼大将兵を率て討て出。玄徳  
ま。鞭を加へ。き。来るもの。趙雲は。い  
と。呼ぶ。彼大将玄徳と。馬より飛。路は傍  
拜。諸人より。住日公孫瓚は。大将なり。真定常  
山。趙雲字は子龍。玄徳ち。一列のち。い  
消息。今。問。趙雲が  
曰く。某公孫瓚の事。北平あり。公孫瓚計。人  
の。練。袁紹は。攻。卒。家。火。付。滅。彼  
その。ち。袁紹。某。用。人。い。某。彼  
成事。乃。主。あ。さ。り。な。卒。北國の方へ出。い  
君。行。未。尋。紹。御座。あ。は。い。や



馳來らんとあの人を哀紹がわやしぬんとてさううと黙  
止たりの外は君とまき人かく四海のあひでを襲奪しと一身を置  
あはけ間裴元紹とくる山賊某が馬を剥取んとて来り  
しと一鎗を刺殺したき手勢を降人とある。まきよより  
と山中より数日を送る昨日張飛古城ありと告るその  
ひの人もまきと打立と行んとあの人を料らざるは是のほど  
まき昨夜の夢に應ずり天乃賜ありといひまきをば女徳あり  
らば喜びを御辺とてび見せ。まきも拾うふのあり。今  
さひいよ相逢とすまきをば趙雲が曰く某四方の國とて經と主  
とまき人を求むると多年卒に君よまきとて真の主ふ。  
今あまのさうを泰りあまを平生の願足まき身と君の為に捨て。

肝腦地まきとる恨むるといひやと去るまきをば女徳その勢をわ  
かまき直に古城へ来りあま張飛諸大將を引と出む久と城  
中へ入なりともまき失散の事と決り二夫人はむびらる。関羽  
が忠義と決らまきをば聽人よ感嘆しと族をまきまき  
まきそのち牛馬を宰しと聚義の酒宴を設け天地を  
まきよりと兄弟再會の喜びを述誌軍は因心賞をあまきと  
昔日の大將とてくあまのなりたるよ趙雲関平周倉とそ  
へまき勇まきとまきといひあまのまき。まきあま軍勢の蕃到を救  
ふるよ五千余騎とまき。まきあまの城の分内せまき。まき叶  
まき汝南の城をたて統りと大儀の計畧を迫ると議する  
知の打つ劉辟龔都使を馳まきまきまき。まき女徳卒に汝



卧牛山  
玄德趙雲  
再會





南は到り四方乃勢と催し、わのやき日、昌あり。袁紹は荆  
 及の消息をきき、とて叔日玄徳と待る。玄徳は関羽張飛  
 ホと汝南の城を指籠りたりと告る。そのあつたを、叔日  
 を出後り、河北乃勢ととぐく起し、攻七おさると怒る。  
 郭圖諫めし、孔明の玄徳は癰疥の病あり、奔置と何  
 むどの事ある。曹操は心腹の病あり、征伐は延引せ、後  
 あつたを禱とあさ、荆州乃劉表の天囷と保ち、兵を  
 り、と怖る。足と、吳乃孫策の威、三江を震、地六郡は  
 らある。周瑜張昭とを謀、魯の輩あつた。程普黃蓋ふと  
 以る武雄の將あり、兵糧交年と貯へ、精兵數十萬とあつた。  
 使を遣し、とむ好むす、南北より曹操を攻を破らむと

いふといは、曹操は破る。天トあふ、乃患うあふ、といひ、  
 袁紹実より同し。汝南は、いふといは、置陳震といふ、  
 又書簡と持せ、吳乃困へ遣し、くる。

孫策殺于吉儂人

吳乃孫策、江東の威を振、兵精しく糧足ま。建安四年  
 の冬、廬江を攻取、黃祖を破り、劉勲を平げ、豫章の太守  
 華歆も、とて降、泰、一、を、勢、い、い、盛、あり、  
 張、然、と、使、と、都、の、お、せ、漢、帝、の、表、を、上、り、其、表、

臣討黃祖以十二月八日到祖所屯沙羨縣劉表將  
 助祖並來趣臣臣以十一日平且部所領江夏太



守行建威中郎將周瑜領桂陽太守行征虜中  
郎將呂範領零陵太守行蕩寇中郎將程普行  
奉業校尉孫權行先登校尉韓當行武鋒校  
尉黃蓋等同時俱進身跨馬一陣手擊急鼓以  
齊戰勢勢如破竹奮激踴躍百輩心精意果各竟  
用命越渡重斬迅疾若飛火放上風兵激煙  
下弓弩並發流矢雨集日加辰時祖乃潰漫鋒  
刃所截燧火所焚前無生寇惟祖迸出計獲其  
妻息男女七人斬虎郎韓晞已下二萬餘級其赴  
水溺死者二萬餘口獲船大小七十餘艘財物如  
山積雜表未擒祖宿校獵為表腹心出作爪

牙表之鳴張以祖氣息而祖家屬部曲掃地無餘表  
獨特之虜成鬼行屍誠比皆聖朝神武遠振臣討有  
罪得效微勤謹表奏聞伏望天覽  
曹操以孫策が勢をひ盛んとし之を稱嘆し獅子の兒と  
もは鋒とあそひがごとく曹仁が女を孫策が弟の孫匡とい  
ふとの妻せと一家の好むを張紘と都の中を雷を置け  
り孫策は日比大司馬の官位を望むと志あり天子は奏聞  
とせしむる曹操はと許さざりし六の中ぬく恨を常に都  
と攻んとするの巧あり吳郡の太守許貢はの由を以て人  
とのむせと帝を表と上はるその表の畧を曰  
孫策驍勇與項籍相似宜加貴寵可以還京邑若



被詔不得還若放于外必作世患當速制之  
 許貢が使去の表を捧都へ上ると。江を渡りたる。番の兵  
 を捕つと。孫策が前を引出さる。孫策表をひたんとす。大に  
 怒り。あざむいて許貢とまねた。再あやゆふ。まを殺さんと  
 巧ぞと責むる。許貢やうらむ。まをうらむ。その意ひを。孫策  
 表をとり出し。まを如何といひ。まを許貢たふべき。辞  
 ま。孫策卒に武士と呼んぞ。絞殺させ。うらまを家に残る。妻子  
 徒類とぐく逃散り。その内は。日比許貢が。鞭ひ置る。賓客  
 あり。三人志しとあはせ。あまを。許貢が。仇と。まを。狙ひ。が  
 ども。その便と。得む。孫策常は。獵と。好と。ある。日兵と。引と。丹徒の  
 西へ。出處と。逐と。深山へ。入諸將と。あは。そを。射取んと。まを

馬とが。あひく。追蒐なり。孫策が。乗たる。馬は。五花馬と  
 せ。世は。傑と。駿足と。あま。出岩の。おろ。悪。起ると。平地と。行  
 ぶ。まを。まを。味方と。あま。た。一騎。飛と。馳と。まを。  
 藪の。陰に。兵三人。弓と。帯。鎗と。持と。立居たり。孫策馬を。ひと。  
 汝。あま。まを。問へ。韓當。手下の。まを。あり。まを。あま。と。鹿と。射  
 へ。と。答へ。孫策。まを。まを。疑。まを。馬と。うら。馳。まを。二人。まを。  
 追蒐。鎗と。中の。孫策。左の。腿と。突。孫策。の。剣と。抜と。砍  
 へ。まを。取。まを。剣と。落。鞘と。中の。戦。まを。又。一人。ち  
 ぐ。と。走。まを。弓と。曳。まを。丁と。射。まを。孫策。が。面。中。り。まを。  
 孫策。事と。まを。まを。その。矢と。抜と。射。返。まを。一人。忽ち。射。殺。まを。  
 残る。二人。鎗と。中の。まを。まを。まを。まを。許貢。が。賓

孫策傳 二 續卷之十



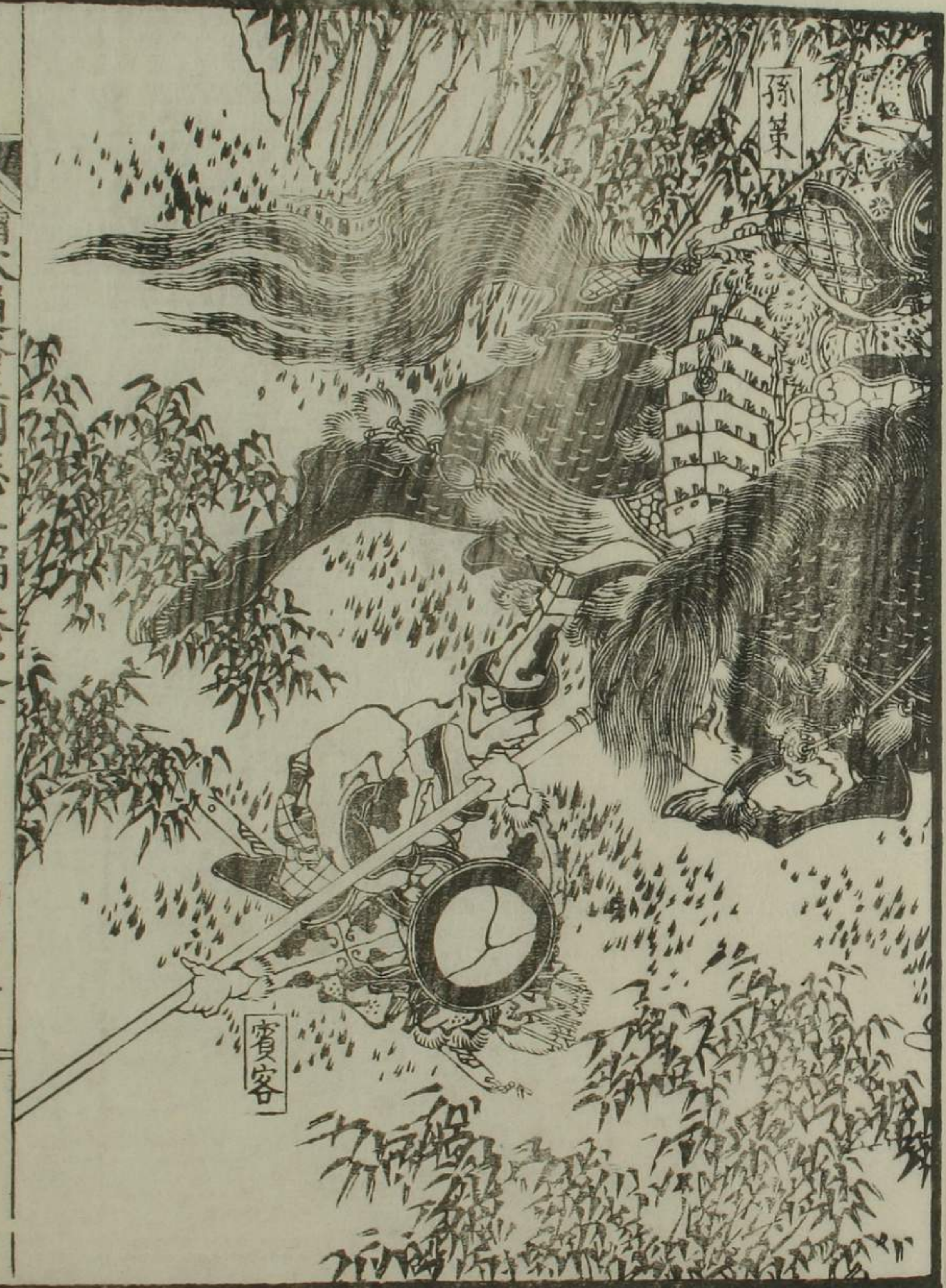
許貢が  
賓客  
孫策と  
討んと  
策る



賓客

賓客

孫策



賓客



客あり今主の讐を報むと呼ぶ孫策武具と持征むせん方  
あく馬上より弓を射り打ちたるも二人を射り退る孫策  
とてぬ十騎の瘡を被り馬も深手を負く事急あるを  
程普五六騎と引り尋ねきたり二人の敵とすこ斬孫策の全  
身と鎧を突き面の瘡深手より血あがると朱はかり「袍を破  
割り瘡をけきみ呉會に入り病を兼ひ奉祀を召し療治させ  
んとすあむれく國中を尋ねぬがとて都におりその門弟  
たり呉よ住み入りやがとよび奇薬を献けよといひを盡  
者やういふを鐵を毒と塗らるる也とて骨を徹せり百日  
内よりけしんぞとなり動くふとあられ萬一怒りのんか  
の氣を激せよばあを瘡うふれば大事よおぶんとて藥を與

か元來孫策の平生性急なり三日のあひども無事よとおぼし  
あふととて二十日あまりと歴て都より人來りぬをばいと召守  
と虚實を問ふその人答へやるる曹操ふく將軍と拍を  
獅子の兎もふ鋒と手ひがじ」とり孫策笑ひて曰く曹  
操が手下の大將ゆゑあふとと拍をう答へ曰く郭嘉と  
いふその一人將軍と拍をう孫策問て曰く郭嘉はとて如  
何いひしぞその人猶豫して答へらるる孫策はつゝ殺さ  
んとすたまよより告げやるる郭嘉はつゝ曹操をむかひ  
孫策は拍をう足むを輕くしくと備とあさすと假令百万の  
勢ありとも安んぞ中國を横行せん尋常性急なりと謀少  
しは是匹夫の勇ありは一人剛力の刺客あふ即時は強暴



の幽鬼とあふん。あふんは云甲斐あはれ小人の手は掛く命と夫あ  
 りんと申す孫策大いん曰く憎き奴が辞うか先日穰は吾  
 と射たりし。あふん奴が計よと曹操が所為あふんを誓  
 と都と攻取漢乃天子を扶くべし。瘡乃瘡と待へるばをやく  
 用意とせよと綱は張昭諫ちて曰く醫者ふりて戒めと  
 百日があひどるあふん動あふんと入り。あふんは一旦の念よす  
 らるる千金の御身と輕んたあふんぞ孫策曰く匹夫を悔  
 らるる是と志のハがと。不日ふ都と取く英雄とあふん張  
 昭ふりて謙ち將軍の瘡平愈しそのち兵と起しあふんと晚  
 よあふんといふと議するふく袁紹が使陳震といふその来りと  
 よ好むむとんと南北より曹操と攻破り天と分と保たんと

言はるへ孫策天乃助ありと喜んぞ城樓は酒宴と設け詔  
 の大將をあつめと。陳震と持成るる。詔大將俄く立膝へ  
 ぞ。紛ととしと樓と下る孫策あふんと。その故と問へ近  
 侍あふんの答と曰く今于吉仙人来りあふんのあふん詔將と  
 あふん拜せんとと立出たり。孫策欄干よりあふんを見をて  
 道人身の長八尺髮鬚ととぐく白く。面桃花のどく飛雲  
 の鶴鬢と著藜の杖と携さ入るるが道乃正面に立まを拜せ  
 んとと詔の大將百姓男女香と焚く来りあふんを幾許と  
 いふことと知ぐ。孫策大に怒り。あふん妖と女乃邪道と申す人  
 まどなま曲者あり。そやく生捕来とと下知し。詔人諫ちて曰  
 まの東國は居住しと。時とまのあふん来る城外は道院ありと夜















私よとるしと得人まき妖人幸時節はあやう。あは雨と得な  
 らが手下の將三ふ是のどくを敬ふはまき禰の基ありといふ  
 と。宝劍と拔持武士は命と斬あらんとまきいれ人はとらと  
 まきと謙む孫策いよく怒り汝ホミか干吉は志たかめと謀及せ  
 ん為りと去りまき一將黙然としと閉口と武士劍とゆゆと  
 干吉が首と斬落しけれた。たゞ一道の青氣東北の方へ飛去け  
 り。孫策あは怒りやぬむ干吉が屍と市にさかす。妖妄の罪と正  
 しる。その夜雨風一通しと。曉いりて。俄く干吉の屍うせ  
 る。その趣に孫策は報とるまき孫策大は奴の番のせのた  
 と殺さんとしる。忽ち堂のよ人は陰雲をまりと干吉まげく  
 とあやと来る孫策劍を被と。まきと斬んとしる。がたちぬち目

昏氣絶と。まのさうまき倒をり。熱人扶けり内は入るまきと  
 昏迷しと醒む。老母吳夫人走り来り。さあはらと哭たるまきと  
 ばらとわらと。契りまき人地付まきと。  
 孫權領衆據江東  
 孫策生出す干吉と殺せるとと熱りまきと。吳夫人うまきと曰  
 汝まげとゆるる神仙の人と殺しと此災を仕出せり。孫策笑ま  
 曰く。まき十六七より父はまたがめと戰場は出人とまらまきと麻の  
 ごとく賢愚その板とまらまきと。卒は禍をまきととまきとい  
 ままの妖人を殺しと。國の害を除く。まきとあんの懼まらまきと  
 吳夫人は曰く。汝不信あるまきと。此のまきと。善事を執行あふ  
 と。まの禍をまらまきと。孫策は曰く。まきと命天あり。妖人あまき

繪舟通仙二函卷之十





孫策



千古魂

千古魂  
王青觀  
出現  
孫策  
惚



禍まるごとくあつて、呉夫人志はりまきとひきと、孫策卒まな  
ひざり、左右のまのども命、ひそく善事と修行し、孫  
策無事といひせらる。その夜、三更、孫策臥房の内  
より、俄に陰雲ありき。傍に燈火きこえんと。又あ  
ららる何ぐさる来るも、あらず吉床のまゝ立あかきまき。孫  
策劍を抜て、投付し、物のたゞ音しけり。孫策立あ  
る。まを平生あや、妖女といひて、誅す。天と志ひ、あ  
のまを汝まて陰鬼とありと。まよとて、我まらば、と叫び  
る。まば干吉、消し、失なり、吳夫人まよとて、あつて、だ  
らまし、けし、孫策病なまは、志ひ、事、行ひ、老母の安  
んぜんと、は、まよ、日まは、全身、黄、あり、と、瘦し、吳夫

人齋、醮と設け、穰とふと、孫策の由と、父と母、あ  
へ、幼少、父、あ、四方、四、方、馳、廻、り、も、卒  
ふ、父、乃、鬼神と、祭り、あ、る、と、ん、母、あ、あ、鬼神、と、祭  
ふ、右、祭、と、仕、あ、る、と、云、呉夫人、白、あ、る、凡人  
天地のあ、生、ま、と、雑、度、死、せ、と、た、清、濁、の、別、あり  
と。その清と稟、る、の、英、魂、外、に、散、せ、と、天、又、升、之、神、と、あ  
り。その濁、ま、ると、稟、た、る、の、幽、魂、散、せ、と、地、又、入、之、鬼、と、あ  
る。聖人の鬼神、之、為、德、其、盛、矣、乎、と、宜、ひ、又、禱、禹、于、上、下、神  
祇、と、太、い、り、古、より、鬼神、と、信、せ、と、ん、あ、る、と、汝、干、吉  
ど、き、神、仙、と、罪、あ、き、ま、げ、と、殺、せ、り。あ、ま、の、報、あ、る、と、ま、き、あ  
る、と、ま、で、人、を、玉、清、觀、は、と、醮、と、設、け、穰、と、ふ、は、む



汝がぶら行と罪と謝せよ。志うるとたの自ら無事あらん。孫策の内への許容せむといふも母の命あまは皆くやあつて遂に轎に乗る。王清觀を行らば道主と名をもち出ひらふ孫策も喜むをばいひて内へ入らる。道士請ト香を焼し。孫策已とと得た。いづる香の焼くとも罪と懺悔せざりらむ。忽ち香爐の中煙いんと。葦蓋のどく立のわりの于吉その下へ出現と孫策大に驚馬たきう。殿中へ出た廻廊と歩らむ。于吉又目のまへに立孫策。從人の腰刀をぬき于吉むらうと投付する。二人刀をとりて倒れし。仆きて死す。諸人あまはとまはさ。死の命と兼て于吉と斬る。ついで刀とては脳とはらぬ。七竅より血とあがりて死ぶ。るる孫策

その屍と葬らせ門外へ出るとまはさ。于吉又觀門のまへに立つた。孫策自らの心おぼしむ。諸人の目よかん。さういふ孫策のあつて怒る。即ち妖人の所為ありと。いづる王清觀の前へ坐し。五百人の武士とてあつて。その道觀と打やぶ。まこと下知し。るるを武士ども屋のわりの瓦とて門を投かる。さうとまらる。入るものあつて真倒れぬ。地を落し手足と打折半死。半生及べり。たゞ孫策が眼をりら。于吉瓦の上へ立あつて。武士どもとておろし。落さるといふ。いづく怒りて一度火をうけさせらる。于吉又炎の中へ立て瓦と投打と雨のどくありし。るる孫策卒に府中へ回ふ。まこと門へ入るとまはさ。于吉又府前へ立あつて。さうとて館より入らば。三方の精兵とそろへて城



外野陣と取武士の命とて斧鉞とゆめと帷幕の四面とま  
 もらせらるる。夜に入て于吉髪とさび死て出来る孫策平曉と  
 いるまど。酒を酔たると。又ハ在人のどくあるひハ叱りあるひさ  
 けんぞ。終夜眠るるのあこぼ。次の日城中ヨ回りんとささき門  
 外又于吉とんる孫策かえりまどしと府中ヨ入りんまば呉夫人  
 まのよとまをかあしと哭く。あの夜も于吉床の前ヨあうま  
 るまば孫策叱り叫ぶと板十度まよんぞ眠るるのあこぼ。板  
 まどは明もまば呉夫人来りて病と問汝が形容まゆと変と  
 瘦衰へうりと去るまば孫策鏡と取寄てしとと大驚馬き  
 左右のよのまむつと。ま顔色とま此のどくあるうへハ今さ  
 いとて國家の大事と。あまきまきとと太山果ざるあま于吉又

鏡の中ヨあうまむつれを孫策鏡と地ヨ投まて妖人と一殺算とけ  
 びらるる金瘡まどぐ破れと昏絶しと死たりなる。呉夫人ハ  
 あしと哭ひて臥房の内ヨなまけ入させらるまば頑更しと生  
 出之のま金瘡のまぶまたるまんと。あま業きまど復生  
 承とあままどといふと即時ヨ張昭ホとめしとやるる。今中  
 園大まどたまて。天下ととぐく分まあまそ。夫吳越の勢と  
 起し三江の要害と保つと。いあま成敗とんるま足り。汝ホま  
 るが弟と相けよと。弟の孫權とまの寄。山江東の兵と率  
 雌雄と兩陣ヨあひと決しと。天下と衡とあまそ。卿ま  
 らびままよみハド。賢人とえまび能ある士とまちひてあめく忠と  
 益させ江東の境と保つといふと。まう人のと卿まよみハド。卿ま

新編通鑑三國志二編卷之十



兄の困を以てたて難難とありて輕く事を行ふるありき  
とて仲綏を解く「乃を孫權拜し命を受孫策母  
をむつて不孝乃子天命も益ぬ慈母は事あるあ  
れむ今印綬を解き弟を讓る孫權へ朝暮訓へ導た父乃  
と死す用ひ来さる 諸將は「んぞ輕んぞあへんべんを呉  
夫人大に哭たあそく汝が弟年幼少と事と立るるあり  
かといふまきと去るま孫策が曰く孫權年幼少とせと某  
は十倍せり江東もあはれ無事ある内事決せむ張昭問  
以外事決せむを周瑜問へたが直に此事と去るま  
とて死す後周瑜已丘するま遺言を傳へ人又諸の  
弟と呼ぶる汝も死すのちも孫權が命を志たが人

も一族の内野心を以てしをまむものあはれ諸人をもまむを誅し  
先祖の墳を葬むとあるま又女房喬氏も年々不幸  
あり汝と中道に別る常は汝が妹を以て夫の周瑜を  
はくし孫權を訓へ導り世堂上乃老母を拜し汝が兄  
弟の義を背くとあつらふま又文武の諸將もむつて  
汝も汝もすま弟も事をも忠義の名を全しせよとて  
又孫權も年々汝も功ある諸將を用ひむ人を免免  
九泉の下におとるあはれ汝も對面せよよく慎めと去置て  
忽然として息絶る時年二十六歳あり孫權床のまへ  
倒れ伏聲をあげて哭きまは張昭諫ちて曰まは君の哭  
きも人とならば今天下定まざるまひたさる哭き哀ん





孫策孫權の遺言と印綬と護

于吉

侍婢

侍婢

孫権

會不風分三回六編卷八



喬氏

孫策

侍婢

孫策孫權の遺言と印綬と護 卷之十



と國家の大事と廢しむる多びいん奸雄きとひ起りと。  
豺狼野心のこの道ある折節た親戚の喪と務と禮法は  
わつめ居ゆふとた困中うあまを變あらんまは門をひき  
と盜の手刻るがどし何んぞ仁といはんた君の外に出と諸軍  
勢と掌りぬ人とたまけと馬のやき乗收父の孫静と喪ら  
るめと執行あがむ孫權字ハ仲謀生ま付方願大口はて  
碧眼紫鬚ありむろ謙の劉瓛といふ人呉に使と孫氏  
の兄弟とんと孫氏の子ととる兄弟も才氣あり志  
ろまどととあとの程と怒るるのあつた孫仲謀一人ハ形  
貌奇偉骨體常あつた大貴相ありまると壽命長久  
あまんと入りまのと孫權江東を保いととふいす安ら

らざる中護軍周瑜兵と率と回りぬと告げまがた喜び  
周瑜がうりくるる人の吾あんの患あまんととふまねち平定せ  
り。いとより周瑜ハ巴丘に居とりる孫策が矢あとりぬとき  
とまるとやう馳入り吳郡とととて死去せりとやたは夜中  
と路といとた来りと柩の前は拜哭と吳夫人出と周瑜は孫策  
に遺言と告げ周瑜白某いりて寄托の重任とあつた吳夫  
人白江東の事よると御辺のふまうと。あつた孫策が言  
と忘るるのなると周瑜地は拜伏し某がわら大馬の力を  
一命ととと忠といきと去らまば孫權来と拜謝とと  
と兄の言とと心とと先生がわらと訓へ周瑜頓首  
とと曰孫がわら肝腦地と塗るといふと。知己の恩と報とと



孫權曰父兄の基と受て江東と保たんとやめを如何  
 ある計畧と用ゆべき周瑜が曰く方今天下大になきて英  
 雄蜂のあつて起る人を得るもの昌と人を得るもの七と  
 たが高明才徳の人とあつて將軍の佐とあつて江東あつて  
 治まると孫權が曰く兄終に臨んと内事へ張昭と問外  
 事へ御辺と問といひあつて浩るものよとみへ周瑜が曰く  
 昭の賢達之士あり將軍より師傅の禮とあつて貴とあ  
 る某の驚鈍より才あるあつて寄託の重とあつて心  
 保つて一人をささぐと將軍と佐けしや孫權問と曰く  
 ある人ぞ周瑜が曰く人の胸に韜畧と懐き腹に機謀と意  
 幼少と父を失ふ母を事と孝とけくとも家富と米三千

解と積との友劉子揚巢湖へ行て鄭寶が處に寄るとり  
 どもこの人いまだ行きて將軍をさまはせしめんと  
 人よと曾肅守の子敬といふものあり孫權大に喜び御辺にい  
 と伴あひ来ると去るを周瑜といふその家といふ曾肅  
 心と堅定なりいかに来りゆると問と答へ周瑜とあつ  
 その意と結る曾肅が曰く劉子揚とまはせしめんと  
 鄭寶とまたると周瑜が曰く馬援が光武帝とあ  
 たると今この世にたが君とる人臣と擇のよとあつて臣なるもの  
 本君と擇ぶといへり今某が主人孫權と志れく賢者と貴  
 才能の士と召すとゆひ先哲の秘論と次と天運と兼と劉氏と  
 伐るとのうあつて東南と與らんといへり事の勢自然とあ

會通三國志二紀卷之十



曆數<sup>しやうすう</sup>の當<sup>あ</sup>ま<sup>り</sup>る。卒<sup>つひ</sup>の多<sup>おほ</sup>く<sup>く</sup>の帝業<sup>ていごう</sup>とほ<sup>ら</sup>す。天心<sup>てんしん</sup>の悒<sup>あ</sup>へ<sup>り</sup>て  
ま<sup>は</sup>た才<sup>さい</sup>ある人の樊<sup>はん</sup>龍<sup>りゆう</sup>附<sup>ふ</sup>鳳<sup>ほう</sup>とて。忠<sup>ちゆう</sup>と盡<sup>じん</sup>し。身<sup>み</sup>と立<sup>た</sup>る時<sup>とき</sup>あり  
とて。今<sup>いま</sup>あるま<sup>は</sup>ら<sup>る</sup>。御<sup>ご</sup>辺<sup>へん</sup>の劉<sup>りゆう</sup>子<sup>し</sup>揚<sup>やう</sup>が言<sup>ことば</sup>とん<sup>ん</sup>のけ  
あ<sup>ま</sup>り<sup>く</sup>と<sup>ま</sup>ら<sup>れ</sup>ん。曹<sup>そう</sup>肅<sup>そく</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>く</sup>志<sup>し</sup>を<sup>こ</sup>ら<sup>ひ</sup>周<sup>しゆう</sup>瑜<sup>ゆ</sup>とあ<sup>ま</sup>り<sup>く</sup>来<sup>き</sup>  
り<sup>て</sup>。孫<sup>そん</sup>權<sup>けん</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>く</sup>敬<sup>けい</sup>ひ<sup>共</sup>道<sup>だう</sup>と論<sup>ろん</sup>と<sup>て</sup>。終<sup>しゆう</sup>日<sup>じつ</sup>倦<sup>けん</sup>  
る<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>。ある日<sup>ひ</sup>曹<sup>そう</sup>肅<sup>そく</sup>とた<sup>た</sup>ぐ<sup>二</sup>人<sup>に</sup>酒<sup>しゆ</sup>と飲<sup>いん</sup>ぶ<sup>あ</sup>ま<sup>り</sup>床<sup>ちゆう</sup>は<sup>あ</sup>足<sup>あし</sup>とま<sup>ま</sup>  
ど<sup>ん</sup>と卧<sup>ふし</sup>る<sup>が</sup>夜<sup>よ</sup>半<sup>はん</sup>の<sup>い</sup>つ<sup>の</sup>問<sup>と</sup>と<sup>ら</sup>る<sup>へ</sup>。今<sup>いま</sup>漢<sup>かん</sup>室<sup>しつ</sup>危<sup>あや</sup>し<sup>く</sup>と<sup>て</sup>四<sup>し</sup>  
方<sup>ちゆう</sup>雲<sup>うん</sup>の<sup>と</sup>く<sup>く</sup>亂<sup>らん</sup>る<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>。父<sup>ふ</sup>兄<sup>けい</sup>の業<sup>ごう</sup>と兼<sup>けん</sup>と<sup>て</sup>。桓<sup>かん</sup>文<sup>ぶん</sup>の政<sup>せい</sup>事<sup>じ</sup>と立<sup>た</sup>  
んとあ<sup>ま</sup>り<sup>く</sup>御<sup>ご</sup>辺<sup>へん</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>く</sup>の<sup>い</sup>つ<sup>の</sup>佐<sup>さ</sup>む<sup>く</sup>人<sup>に</sup>曹<sup>そう</sup>肅<sup>そく</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>く</sup>曰<sup>い</sup>ひ<sup>て</sup>曰<sup>い</sup>ひ<sup>て</sup>  
漢<sup>かん</sup>の高<sup>かう</sup>祖<sup>そ</sup>常<sup>じょう</sup>義<sup>ぎ</sup>帝<sup>てい</sup>と尊<sup>そん</sup>と<sup>て</sup>。事<sup>じ</sup>へ<sup>ん</sup>とま<sup>ま</sup>ひ<sup>て</sup>い<sup>て</sup>卒<sup>つひ</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>く</sup>  
い<sup>ま</sup>ら<sup>る</sup>。項<sup>けい</sup>羽<sup>う</sup>が害<sup>がい</sup>とあ<sup>ま</sup>り<sup>く</sup>と<sup>て</sup>め<sup>め</sup>つ<sup>て</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>く</sup>。今<sup>いま</sup>曹<sup>そう</sup>操<sup>そう</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>く</sup>

項<sup>けい</sup>羽<sup>う</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>く</sup>將<sup>しやう</sup>軍<sup>ぐん</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>く</sup>と<sup>ら</sup>る<sup>が</sup>。桓<sup>かん</sup>文<sup>ぶん</sup>た<sup>ら</sup>る<sup>が</sup>得<sup>え</sup>る<sup>が</sup>某<sup>たが</sup>が愚<sup>ぐ</sup>意<sup>い</sup>  
とめ<sup>め</sup>つ<sup>て</sup>計<sup>けい</sup>る<sup>が</sup>。漢<sup>かん</sup>の天<sup>てん</sup>ト再<sup>さい</sup>び<sup>て</sup>真<sup>まこと</sup>る<sup>が</sup>人<sup>ひと</sup>と<sup>て</sup>。曹<sup>そう</sup>操<sup>そう</sup>又<sup>また</sup>き<sup>き</sup>ら<sup>る</sup>と<sup>て</sup>七<sup>しち</sup>  
お<sup>お</sup>し<sup>し</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>と。た<sup>た</sup>ぐ<sup>二</sup>君<sup>きみ</sup>の<sup>い</sup>つ<sup>の</sup>為<sup>ため</sup>と<sup>て</sup>計<sup>けい</sup>る<sup>が</sup>と<sup>て</sup>江<sup>かう</sup>東<sup>とう</sup>の要<sup>よう</sup>害<sup>がい</sup>と<sup>て</sup>引<sup>ひ</sup>籠<sup>かご</sup>り<sup>て</sup>  
鼎<sup>てい</sup>足<sup>そく</sup>の勢<sup>せい</sup>ひと<sup>て</sup>ほ<sup>ら</sup>す。天<sup>てん</sup>下<sup>か</sup>の隙<sup>ひま</sup>と<sup>て</sup>窺<sup>うかが</sup>ひ<sup>て</sup>い<sup>て</sup>。ま<sup>ま</sup>ら<sup>る</sup>と<sup>て</sup>た<sup>た</sup>ら<sup>る</sup>  
世<sup>よ</sup>の人<sup>ひと</sup>嫌<sup>きら</sup>ひと<sup>て</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>く</sup>と<sup>て</sup>。北<sup>ほく</sup>國<sup>こく</sup>の事<sup>じ</sup>多<sup>おほ</sup>く<sup>く</sup>の<sup>い</sup>つ<sup>の</sup>曹<sup>そう</sup>  
操<sup>そう</sup>も假<sup>かり</sup>ふ<sup>が</sup>。ま<sup>ま</sup>の<sup>い</sup>つ<sup>の</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>く</sup>と<sup>て</sup>。黃<sup>わう</sup>祖<sup>そ</sup>と平<sup>へい</sup>げ<sup>く</sup>と<sup>て</sup>。荆<sup>けい</sup>及<sup>及び</sup>の劉<sup>りゆう</sup>表<sup>ひょう</sup>と伐<sup>は</sup>長<sup>ちやう</sup>  
江<sup>かう</sup>の險<sup>けん</sup>阻<sup>そ</sup>とめ<sup>め</sup>つ<sup>て</sup>と<sup>て</sup>。要<sup>よう</sup>害<sup>がい</sup>と<sup>て</sup>守<sup>まも</sup>る<sup>が</sup>と<sup>て</sup>。後<sup>のち</sup>は<sup>あ</sup>ま<sup>り</sup>皇<sup>かう</sup>帝<sup>てい</sup>の位<sup>ゐ</sup>と<sup>て</sup>即<sup>すなは</sup>  
ち。天<sup>てん</sup>トと<sup>て</sup>い<sup>て</sup>。國<sup>こく</sup>の<sup>い</sup>つ<sup>の</sup>つ<sup>て</sup>。ま<sup>ま</sup>は<sup>あ</sup>ま<sup>り</sup>漢<sup>かん</sup>の高<sup>かう</sup>祖<sup>そ</sup>の業<sup>ごう</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>く</sup>孫<sup>そん</sup>權<sup>けん</sup>が曰<sup>い</sup>ひ<sup>て</sup>ま<sup>ま</sup>  
か<sup>か</sup>と<sup>て</sup>一<sup>いつ</sup>方<sup>ちゆう</sup>は<sup>あ</sup>ま<sup>り</sup>盡<sup>じん</sup>と<sup>て</sup>。漢<sup>かん</sup>室<sup>しつ</sup>と輔<sup>ほ</sup>んと<sup>て</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>る</sup>。御<sup>ご</sup>辺<sup>へん</sup>の教<sup>けう</sup>と<sup>て</sup>ま<sup>ま</sup>  
ど<sup>ど</sup>ら<sup>る</sup>と<sup>て</sup>。魯<sup>ろ</sup>肅<sup>そく</sup>が曰<sup>い</sup>ひ<sup>て</sup>古<sup>こ</sup>人<sup>にん</sup>の言<sup>ことば</sup>と<sup>て</sup>人<sup>ひと</sup>比<sup>ひ</sup>皆<sup>みな</sup>可<sup>か</sup>以<sup>い</sup>為<sup>を</sup>堯<sup>ぎやう</sup>舜<sup>しん</sup>とい<sup>い</sup>  
へ<sup>り</sup>。但<sup>た</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>く</sup>と<sup>て</sup>。將<sup>しやう</sup>軍<sup>ぐん</sup>の<sup>い</sup>つ<sup>の</sup>為<sup>ため</sup>と<sup>て</sup>。孫<sup>そん</sup>權<sup>けん</sup>又<sup>また</sup>喜<sup>き</sup>ひ<sup>て</sup>席<sup>せき</sup>と



起と謝と曰ふ。ふく御辺の訓と兼。杯がくわとる事と計りて。あまぐく富貴を享んと。曾肅が老母の衣服帷帳をたまひるま。曾肅その厚志を感ず。又一人こも。出さ其人の世の乱を避く。江東の道。詩書とあま。春秋の道。母の事と孝とほく。すあま。瑯琊南陽の人。志尊字の子瑜といふものあり。孫權あま。敬以上賓とあ。尊は。曾肅を。袁紹と交りを絶。曹操ま。たぐい。後。又曹操。減。あ。孫權。袁紹が使。陳震と追。書簡とあ。交りを絶。曹操。孫策が死。たる。傳へ。大軍と起。呉と平。と去。侍御史張紘。ま。謙。人の妻。の。軍と。古の道。

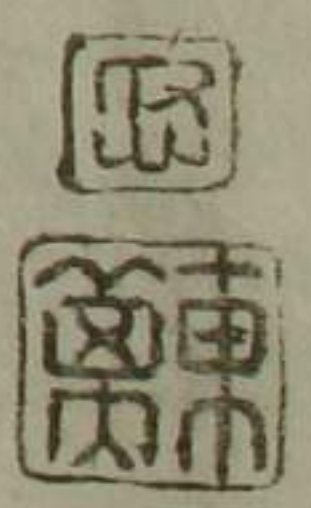
あ。勝とあ。と死。あ。仇とあ。根とあ。とあ。とあ。深。あ。の。恩とあ。とあ。とあ。孫權。討虜將軍。領會稽太守。封。張紘。會稽の都尉。封。印。あ。呉。心。権。喜。張紘。あ。用。あ。張昭。とあ。國政を治。せ。張紘。又。一人。あ。出。あ。の。人。の。酒と飲。嚴厲正大。す。漢の中郎將。蔡伯喈。が。徒弟。呉郡。呉人。顧雍。字。元嘆。あ。孫權。の。郡。太守の事。行。あ。威勢。遠。近。振。江東。軍民。と。其。徳。あ。

繪本通俗三國志二編卷之拾大尾



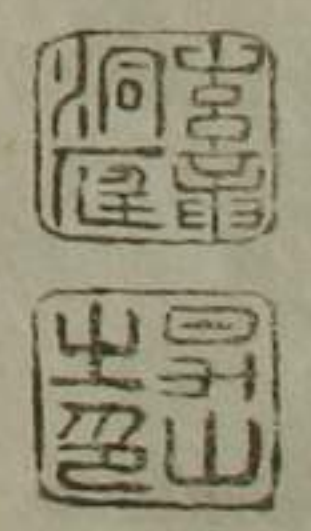
皇都

池田東籬亭主人校合



東武

葛飾戴斗畫



浪花

内山權窟淨書  
井上治兵衛 刀

繪本通俗三國志三編 近日出版

曹操官渡袁紹戰於官渡  
劉備神翼吳子生周瑜  
曹操破于就中長坂橋張飛趙雲曹兵殺馬  
重工精妙とありて看客競て縮みんと希ふ

和漢

書籍賣捌處

西洋

大阪心齋橋博勞町角

群玉堂河内屋 岡田茂兵衛



